

# 「われわれも繁栄できる」

## JPC 70th

# クロニクル

第1回

chronicle

## JPC創設前史(上)

### ■ハットンの著作

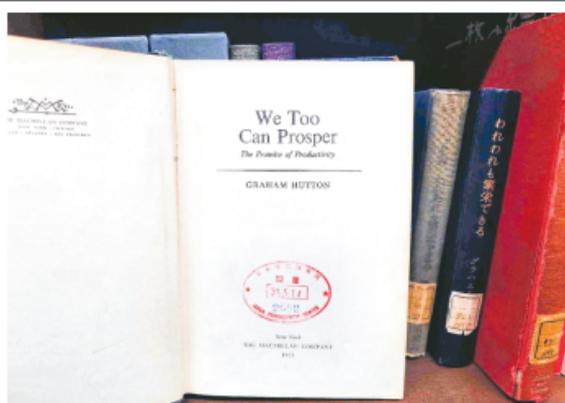
グラハム・ハットン著『WE TOO CAN PROSPER (邦訳・われわれも繁栄できる)』

後に日本生産性本部(JAPANESE PRODUCTIVITY CENTRE) JPC

創設の推進役となる郷司浩平(1900

1989、当時は経済同友会常任幹事)は1953年5月、ウィーンでの国際商業会議所総会に出席するため、ヨーロッパに向かった。その際、ロンドンで

グラハム・ハットン著『WE TOO CAN PROSPER (邦訳・われわれも繁栄できる)』。訳書は1954年、時事通信社刊。



時事通信特派員から、生産性運動のバイブルとも言わなければならない

献を示された。米国に視察団を送り、未曾有の繁栄の秘密を学習した英米生産性協議会の活動を詳述した本だ。後に郷司は次のように語っている。

「イギリスは一九四八年に生産性協議会をつくって、労使の視察団をアメリカに送った。その際彼らはおそらくアメリカの技術が戦時中にも進歩していたんだらうというひとつの予断をもって行ってみ

たが、技術もさることながら、それよりもっと大きな要因は、経営が刷新されているという事実だった。(中略) 僕はそれを読んで

非常に感銘を受けたんです。」(「証言・高度成長期の日本」「エコノミスト」)

でその話(英米生産性協議会の)を聞き、かつまた、参考文献もあつて、目をとおして

「日本でもこれを」郷司はハットンの著作に感銘を受け、一つの決意を抱いて53年夏に帰国した。「わたしは、イギリス

でもこれを」と呼びかけた。

日本生産性本部は2025年3月1日、創立から70周年を迎えた。連載では、これまでの主な足跡を振り返るとともに、そこからミライの生産性運動を切り開くヒントを見出していきたい。(文中・敬称略)

【参考文献】『生産性運動50年史』(社会経済生産性本部、2005年)